

# 茨城県高萩市方言における上昇下降イントネーション\*

佐藤 久美子

長崎外国語大学

sato@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

高萩市方言、文末イントネーション、対話、繰り返し、情報把握

## 1. はじめに

文末イントネーションの研究は、異なる二つの観点から分析が行われている。一つ目は、文末イントネーションは対話における構造情報を表示するという考え方である。片桐 (1997)は、上昇は構造の継続を表し、下降は構造の区切りを表すと分析している。二つ目は、文末イントネーションは話し手の意向や心的な態度や状態を表示するという考え方である (金水・田窪 1996, 小山 1997, 森山 1997)。

本論文は二つ目の観点に立って分析を進める。茨城県北部に位置する高萩市で話されている高萩市方言を取り上げ、この方言を特徴付ける文末イントネーションの意味を記述する。分析対象とするのは、ピッチが文末まで下降せず、文の最終音節、もしくは最終拍で急激に上昇下降するというイントネーションである<sup>1</sup>。以下、これを上昇下降イントネーションと呼ぶ (例文中では ↘ で表す)。このイントネーシ

---

\* 本論文中のデータは筆者の内省によるものである。筆者は 1979 年に茨城県高萩市に生まれ、18 歳まで同市に滞在した。

<sup>1</sup> 急激な上昇下降が最終音節に生じるか、最終拍に生じるかは自由である。従って、撥音や長音などの特殊拍を含んだ音節では二つのパターンが観察される。以下の(i)は特殊拍を含む音節、(ii)は長音を含む音節の例である。急激な上昇下降が生じる部分を[ ]で囲む。それぞれ最終音節に生じる場合と最終拍に生じる場合が観察される。

- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| (i) [ホン] (本) | (ii) ジ[ユー] (自由) |
| ホ[ン]         | ジュ[ー]           |

ョンは、対話中に頻繁に観察される。例えば、下の(1)は、話し手 B が相手 A の発言の一部を繰り返すといった場面である。

- (1) A : 直也が試験で満点取ったって。  
B : 直也が ↙  
A : 頑張って勉強してたからね。

繰り返し以外でも、相手の発話を受けて、より正確な情報を求めるような発話で観察される。

- (2) A : メールしといたよ。  
B : 携帯で ↙  
A : うん。

高萩市の上昇下降イントネーションと類似したピッチパターンは、栃木方言と福島方言でも観察されることが指摘されている。栃木方言を対象とした高丸・松田 (2008)は、それを「聞き返し型の疑問形における句末モーラの凸型パタンのイントネーション」と呼び、句末上昇というピッチパターンモデルの検討を行っている。一方、福島方言の問い返し疑問を研究対象とした白岩 (2011a)では、福島方言では、当該のイントネーションは必ずしも相手の返答を必要としないため、「問い返し」(高丸・松田(2008)の「聞き返し」)ではなく、話し手の「情報把握」を表すイントネーションであると述べている。相手の発話に含まれる情報をきちんと把握したことのアピールとして使われると言う。

(1)の例を見ると、高萩市方言の上昇下降イントネーションも、白岩 (2011a)が述べている通り、必ずしも返答を要求していないことが分かる。また、B が、A の発話に含まれる情報「直也が」をきちんと把握したということを A にアピールしている、という記述に矛盾ない。

(2)はどうだろうか。繰り返しではなく、相手の発話を受けて、より正確な情報を求めるような場面である。高丸・松田 (2008)は、聞き返し型を (i) 単語の反復 (ii) 内容の確認 (iii) 確認語の三つに分類している。(2)はこのうちの(ii)に相当するものである。白岩 (2011a)は繰り返し以外のデータには言及していないが、福島方言の文末イントネーション全体を扱った白岩 (2011b)では、「話し手が、聞き手との間に差

がないと見込んでいることを示す」と記述されている。つまり、(2)では、BはAが携帯でメールをしたということを何らかの理由により信じており、それが当然だと見なしている態度がAに対して示されることになる。



以上、同様のイントネーションを研究対象としている、高丸・松田(2008)と白岩(2011a, b)を概観した。それぞれ栃木方言、福島方言を扱った論文であるため、その一部を取り上げて高萩市方言と比較することは困難であり、慎重にならなければいけない。しかし、上述した通り、ここで取り上げる茨城県高萩市方言の上昇下降イントネーションがこれら二つの方言と類似した音声的、意味的特徴を有していることは明らかである。

本論文では、高萩市方言における上昇下降イントネーションがどのような言語形式において実現するのか、また、どのような文脈で実現するのかを詳述する。そして、その実現を、白岩(2011a, b)による福島方言の記述と比較し、合致する点と残された問題点を挙げる。

## 2. 高萩市方言における音調の特徴

高萩市方言は、栃木方言や福島方言と同様に、語彙的なピッチの指定を持たない無アクセント方言である。東京方言のように、ピッチによって単語を区別することはない。従って、文の音調の実現に語彙的なピッチの指定は関与しない。



以下、上昇下降イントネーションの記述を行う上で、これとは異なる、上昇を含む文末イントネーションに言及する。次の(3)の二つのイントネーションである。

- (3) a. 下降上昇イントネーション  
文末に向かって下降し、最終音節、もしくは最終拍で急激に上昇する (  で表す)
- b. 上昇イントネーション  
文末に向かって上昇する<sup>2</sup> (  で表す)



---

<sup>2</sup> 上昇イントネーションのピッチの様相について、査読者よりいくつかの可能性を指摘していただいた。本論文で問題となる(4), (5), (22)については(3b)の「文末に向かって上昇する」で問題ないが、今後詳細を検討する必要がある。

例えば、下の(4)は「誰が食べたか知っているか?」という質問である。(3a, b)で挙げた二つのイントネーションが生じる。

(4) これ、誰が食べたか{ 知ってっけ  / 知ってっけ  }

また、これら二つのイントネーションは、問い返しの文脈にも生じる。(5)で、BはAの発話の一部「チャナツカレ」が理解できず、もしくは聞き取れず、その部分を繰り返している。

(5) A: 今度、チャナツカレに行くんだ。  
B: { チャナツカレ  / チャナツカレ  }

以下では、(3a, b)のイントネーションと比較を行いながら、上昇下降イントネーションの観察を進める<sup>3</sup>。

### 3. 観察

3節では、3.1節で上昇下降イントネーションの実現に関わる形式的な側面を述べた後、3.2節で相手の発話を繰り返す場合を、3.3節でそれ以外の場合を詳しく観察する。

#### 3.1. 形式

上昇下降イントネーションは、語や文節単位から成る、[名詞句(＋助詞)]から成る一語文で実現することが多い。なお、本節で挙げるのは全て文末に上昇下降イントネーションが生じる例である。見やすさのために、例文中の記号を省略する。

---

<sup>3</sup> (3a)と(3b)のイントネーションについては、白岩(2011a)が福島方言の問い返し疑問に見られるイントネーションとして取り上げ、大変興味深い意味記述を行っている。福島方言では、(3a)は問い返しに加え、一般の疑問文でも現れるが、(3b)は問い返しでのみ現れる。また、問い返しでも、(3a)と(3b)では、基本的意味が異なるという。これに対し、高萩市方言では、(4)で示した通り、一般の疑問文において(3a)と(3b)が共に容認され、(3b)が問い返し専用のイントネーションとは言えない。ただし、高萩市方言においても、この二つのイントネーションを同一には扱えない。例えば、「誰が食べた」のように、疑問詞を含む複数の語からなる疑問文で、かつ文末に「の」がない文では、(3b)は問い返しとしか解釈されない。一方、(3a)は問い返しとも一般の疑問とも解釈される。(3a)と(3b)の違いについては、今後詳細な観察を行った上で、他方言との比較を念頭に置いた記述を行いたい。

- (6) a. 太郎  
b. 太郎が  
c. 太郎から

複数の語が連続する名詞句や、埋め込み節を含む長い名詞句から成る一語文、名詞化辞「の」が後続する名詞句で実現することもある。

- (7) a. 太郎の猫  
b. 太郎が拾った尾曲がり猫  
c. 太郎が拾ったの

一方、名詞化されていない文では基本的には上昇下降イントネーションは実現しない。

- (8) a. \*太郎だ  
b. \*拾った  
c. \*かわいい

ただし、疑問などを表す文末詞「け」や「の」が後続する場合、名詞句以外にも上昇下降イントネーションが実現する。

- (9) a. 太郎け                      太郎なの  
b. 拾ったけ                    拾ったの  
c. かわいけ                    かわいいの

名詞句や(9)の他、事実を確認したり、程度を表す副詞から成る一語文でも実現する。

- (10) a. 本当に  
b. そんなに  
c. 全然

[名詞句 (+助詞)] から成る文や、疑問の「の」が後続する場合でも、上昇下降イントネーションが実現しない場合がある。それは疑問詞を含む場合である。

- (11) a. \*誰  
b. \*誰の猫  
c. \*誰が来たの

ただし、引用を表す「って」が続く場合は、どのような形式にでも実現しうる。

- (12) a. 「太郎だ」って  
b. 「拾った」って  
c. 「誰」って  
d. 「誰が来たの」って

ここで、上昇下降イントネーションが実現しうる形式を整理する。

- (13) 副詞からなる一語文、[名詞句(+助詞)]から成る文において上昇下降イントネーションが実現しうる。ただし、疑問の「け」や「の」、引用の「って」が後続した場合、どのような要素においても実現しうる。疑問詞を含む場合は「って」が後続する場合のみ実現可能である。

(3a)の下降上昇イントネーション、(3b)の上昇イントネーションと比較すると、形式的な側面において異なる点がある。これら二つのイントネーションは名詞句や副詞以外の文にも、疑問詞を含む文にも実現しうるという点である。

以上のように、上昇下降イントネーションは他のイントネーションと異なり、特定の形式にのみ実現する。このような制限がなぜ課せられるのかという問題は今後の課題としたい。

最後に、イントネーションの実現について記述を補足する。文末の上昇下降イントネーションは、常に「ピッチの下降を伴わない」部分に後続して実現する。しかし、このことは、上昇下降イントネーションが生じる全ての文において、文末以外にピッチの下降がない、ということの意味していない。下の(14a)と(14b)は、それぞれ一つの語「あの猫」と「太郎は」にピッチの下降が生じている例である。ピッチの下降が生じる語を太字のゴシック体で表す。

- (14) a. **あの猫**太郎が拾ったの ↘  
b. **太郎は**猫を拾ったの ↘

これについては、特定の音調が実現する範囲として韻律句を仮定することで記述できる。(14a, b)の文はそれぞれ以下(15a, b)のように二つの韻律句から成っており、右側の韻律句が上昇下降イントネーションが実現される最終音節が属する韻律句であると考えられるのである。「あの猫」と「太郎は」はそれとは異なる韻律句であるため、ピッチの下降が生じるのである。

- (15) a. (あの猫) (太郎が拾ったの)  
b. (太郎は) (猫を拾ったの)

韻律句はどのように形成されるのかという問題については様々な議論があるが、文中の意味的な焦点がそれに深く関わっていることが知られている。(14a, b)は、例えば次のような状況で発話される。(14a)は、ある猫が話題となっており、それが「太郎が拾った」猫だったということを知り、驚いているような状況である。一方、(14b)は、太郎が話題となっており、太郎が「猫を拾った」ということを知り、驚いているような状況である。つまり、「太郎が拾った」と「猫を拾った」がそれぞれの文の意味的な焦点となっているのである。(15a, b)で示した右側の韻律句は、文中の意味的な焦点から成っていると考えられる。以上の考察に加えて、韻律句の形成については更に多くの議論が必要であるが、本論文は文末の上昇下降イントネーションの意味の記述を目的としたものであるため、その議論にはこれ以上触れないことにする<sup>4</sup>。

以下、3.2節と3.3節では、上昇下降イントネーションを、同じく上昇を含む二つのイントネーション(3a), (3b)と比較をしながら、文脈によってイントネーションがどのように実現するのかを観察する。

### 3.2. 相手の発話を繰り返す場合

本節では、相手の発話を繰り返す場合を取り上げる。話し手が相手の発話の一部に注意を払い、繰り返す場面である。(1)で挙げた例を下

---

<sup>4</sup> Igarashi (2013) は、無アクセントと一型アクセントの区別という観点から、高萩市方言における韻律句の成り立ちについて記述している。

に再掲する。

(16)では、BがAの発話「直也が試験で満点取ったって」の一部である「直也が」を繰り返している。Bの発話には、直也が満点を取ったことに対する驚きが表れている。

- (16) A：直也が試験で満点取ったって。[(1)を再掲]  
B：直也が ↙  
A：頑張って勉強してたからね。

下の(17)では、BがAの発言「今からちょっとコンビニに行ってくるね」の一部である「今から」を繰り返している。

- (17) A：今からちょっとコンビニに行ってくるね。  
B：今から ↙  
A：すぐ戻るよ。

この文脈では、「こんな夜遅くに出かけるのは良くない」といったBを咎めるような意味が加わることがある。しかし、同じ(17)の文脈で、Bは「今から」の後に「じゃ、私も一緒に行こうかな」と続けることも可能である。すなわち、否定的な態度や同意を表す機能は、上昇下降イントネーション自体が持つ機能ではないということである<sup>5</sup>。

ここで付け加えておきたいのは、(16)の「直也が」と(17)の「今から」では(3a)下降上昇イントネーションや(3b)上昇イントネーションが実現しても違和感がないという点である。高丸・松田(2008)が上昇下降イントネーションを「聞き返し型の疑問形」と呼ぶのは(16)や(17)のような観察によるものだと考えられる。ただし、聞き返すという場面であっても、上昇下降イントネーションが非文法的になる場合がある。また、文脈によって上昇下降イントネーションが容認されない場合がある。以下、それらを示す例を挙げる。

次の(18)の繰り返しを見てみよう。Bの発言の一部である「太郎」を繰り返すのは文法的だが、「太郎は」を繰り返すのは非文法的である。

---

<sup>5</sup> 堀口(1988)は、同意や否定という態度を表す機能は、繰り返しやあいづち、言い換えが持つ機能であるとしている。



- (18) A : 太郎は何してるの？  
B : {太郎 ↘ / \*太郎は ↘ } 太郎はまだ部屋で勉強してるよ。

名詞に「は」が後続した場合に非文法的となるのは、第2節の(13)の記述に矛盾があるように思える。(13)では、[名詞句(+助詞)]では上昇下降イントネーションが実現しないと述べているが、「太郎は」はこの形式に該当するにも関わらず、上昇下降イントネーションが実現しないからである。

この問題については、森山(1997)の分析に従って解釈したい。森山(1997)は、「名詞一語に「は」をつけた場合の上昇イントネーションでは、その部分がトピックになり、後部要素がコメントという意味に限定される (p. 88, ll. 8-10)」と述べている。つまり、以下の(19a)は、(19b)のように、疑問詞が後続するような意味になるのである。

- (19) a. 太郎は？  
b. 太郎は 何してる / どうした？

この分析に基づいて、(18)の「太郎は」は意味的な疑問詞を含む文であると仮定する。(13)の「疑問詞を含む場合は『って』が後続する場合のみ実現可能」という条件により、上昇下降イントネーションが実現しないと説明することができる。

次の(20)と(21)は、文脈によって上昇下降イントネーションが容認不可能になることを示す例である。(20)と(21)では、BはAの発言の一部である「チャナッカレ」を繰り返している。(20)が容認不可能である一方、(21)は容認可能である。



- (20) A : 今度の夏休みに、チャナッカレに行くんだ。  
B : #チャナッカレ ↘ どこ、そこ？

- (21) A : 今度の夏休みに、チャナッカレに行くんだ。  
B : チャナッカレ ↘ いいね。私もまた行きたいな。

(20)と(21)の違いは、Bがチャナッカレを知っているかどうかである。(20)では、Bは文脈からチャナッカレが場所の名前であることは認識

しているが、それに関する知識を全く持っていないという状態である。(21)では、B はチャナッカレに行ったことがあり、チャナッカレに関する知識を持っているという状態である。

(21)の文脈では、下降上昇イントネーション、もしくは上昇イントネーションが実現する。

(22) { チャナッカレ  / チャナッカレ  } どこ、そこ？

以上の観察から、文脈という点からも、繰り返しのイントネーションとは言えないこと、また、下降上昇イントネーション、上昇イントネーションとは異なる性質を持っていることが明らかになった。


本節の最後に、繰り返しと深い関わりを持つ「問い返し」におけるイントネーションを詳しく記述している、白岩 (2011a)に言及したい。白岩 (2011a)では、「(前略) 単に相手の発話に含まれる情報を了解したという話し手の「情報把握」を表すイントネーションではないかと考えられる (p. 27, ll. 8-10)」と述べている。この記述は、(16)と(17)で上昇下降イントネーションが実現すること、(18)の「名詞+は」で実現すると非文法的であること、(20)の知らないことを述べる場合に容認不可能になることと矛盾しない。また、(11)の疑問詞を含む名詞句に実現すると非文法的であることも説明できる。(11), (18), (20)はいずれも、「情報を了解した」という状況に合致しないのである。

### 3.3. 繰り返し以外の場合

上昇下降イントネーションは、繰り返し以外にも、相手の発話を受けて、より正確な情報を求めるような発話で観察される。また、相手が何も発話していない場合でも、相手の行動を受けて、相手の考えを推測するような発話で観察される。まず、後者の例から見ていく。

(23)は、相手が何も発話していない場合である。(23)では、A と B が旅行の計画を立てているという状況である。B は無言だが、B の行動を受けて、A は「B が行きたいのはトルコだ」と推測する。

(23) A と B が一緒に旅行の計画を立てている。A は B がずっとトルコの HP を見ているのに気づく。

A : トルコ 

(24)では、Aがお菓子がなくなっている理由をBに尋ねたが、Bは無言である。しかし、Bの行動を受けて、Aは「Bが『太郎が食べた』と考えているのだ」と推測する。

(24) テーブルに空になったお菓子の袋が置いてある。それを見たAがBに尋ねる。

A：これ、どうしたの？

B：(ちらりと太郎を見る)

A：太郎が食べたの ↙

(23), (24)の例の上昇下降イントネーションを、下降上昇イントネーションで発話することも可能である。ただし、その場合発話の意図が異なる。(25)と(26)は、(24)と同じ状況での発話であるが、Bの返答に違いがある。(25)の上昇下降イントネーションに対しては、「太郎が食べた」を否定する返答に加えて、「『太郎が食べた』ということ自分には言っていない」と、Aの推測を否定する返答が可能である。一方、(26)の下降上昇イントネーションでは、後者のような返答は非常に不自然である。

(25) A：太郎が食べたの ↘

B：違うよ！／そんなこと言ってないよ！

(26) A：太郎が食べたの ↗

B：違うよ！／#そんなこと言ってないよ！

下降上昇イントネーションは、話し手が相手の考えを推測したということが、相手に強く伝わるのである。

これらの例は、白岩 (2011b)の記述と合致する。

(27) 上昇下降調の基本的特徴

話し手が、当該の事態に関する情報量や意見について、話し手と聞き手の間に差がないことを見込んでいることを示す(実際には差がある場合でも、本来は差がなくて当然とみなしている)。

(25)で B が A の推測を否定するということは、B が、A の見込み (A 自身と B には差がない) を否定することに他ならない。

次に、相手の発話を受けて、より正確な情報を求めるような場面を見る。(2)で挙げた例を(28)に再掲する。(28)では、B が、A からの情報「メールをした」について、より正確な情報を求めて、その手段を A に確認している。

- (28) A : メールしといたよ。[(2)を再掲]  
B : 携帯で ↙  
A : うん。

(27)の記述によれば、B は A が携帯でメールをしたということを何らかの理由で信じており、そうであって当然だと見なしているという態度が A に対して示されることになる。この記述は、(28)が、A のメールを確認し、それが携帯から送られてきたことを知っていても発話できることから適切だと考えられる。この場合、「携帯でメールを送るのは良くない」といった A を咎めるような意味が加わる。これは、知っていることをわざわざ確認するという行為から生じるもので、上昇下降イントネーション自体が持つ機能ではない。(17)の繰り返しの例と同様である。

#### 4. まとめと課題

本論文では、茨城県高萩市方言における上昇下降イントネーションがどのような言語形式において実現するのか、また、どのような文脈で実現するのかを詳述した。形式については 3.1 節の(13)にまとめた。(13)を下に再掲する。

- (13) 副詞からなる一語文、[名詞句 (+助詞)] から成る文において上昇下降イントネーションが実現しうる。ただし、疑問の「け」や「の」、引用の「って」が後続した場合、どのような要素においても実現しうる。疑問詞を含む場合は「って」が後続する場合のみ実現可能である。

文脈については、「繰り返し」の場合とそれ以外に分けて観察を行った。3.2 節では「繰り返し」、3.3 節ではそれ以外の場合を取り上げた。これらの例は、福島方言を対象とした白岩 (2011a, b) の「情報把握」という観点を以て、矛盾なく記述できることを示した。

以下では残された課題を挙げる。今後の課題は、高萩市方言の文末イントネーションを体系的に記述することである。例えば、(13)で示したとおり、高萩市方言では、上昇下降イントネーションは限られた特定の形式にのみ実現する。このような制限がなぜ課せられるのかは、異なる文末イントネーションと比較することで明らかになると考える。特定の形式との共起制限があるという事実がどのような意味をもつのか、十分に議論する必要がある。議論を通して、文末イントネーションの意味をより正確に記述できるだろう。一方言の研究としてより精密な記述を行いたい。

本論文では文末イントネーションの一部を扱うに留まったため、栃木方言や福島方言との比較も限定的なものになっている。今後は、他方言、他言語との対照研究を視野に入れ、記述を進めたい。第1節で述べたとおり、文末イントネーションは対話、談話研究において扱われており、その意味や機能が議論されている。特に、文末イントネーションが話し手の意向や心的な態度や状態を表示するという考え方に注目したい。例えば、小山 (1997) は、「どのような態度を聞き手に望むか、といった話し手の意向に関わる」と述べている。また、上昇イントネーションに関しては、田窪・金水 (1996) は「立証中であることを示す」、森山 (1997) は「探索的態度の表示になる」と述べている。このような観点から記述を進め、他方言、他言語との対照研究につなげたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、査読者より丁寧なご指摘、貴重なご助言をいただいた。より適切な記述を行うことができたと同時に、一部は今後の課題として整理することができた。心より感謝申し上げたい。なお、本論文における不備の責任はすべて著者にある。

## 参照文献

- 堀口純子 (1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64. pp. 13-25.
- Igarashi, Yosuke (2013) *Typology of intonational phrasing in Japanese dialects*, Sun-Ah Jun (ed.) *Prosodic Typology II*, New York: Oxford University Press. pp. 464-492.
- 片桐恭弘 (1997)「終助詞とイントネーション」音声文法研究会 (編)『文法と音声』pp. 235-256. 東京: くろしお出版.
- 小山哲春 (1997)「文末詞と文末イントネーション」音声文法研究会 (編)『文法と音声』pp. 97-119. 東京: くろしお出版.
- 森山卓郎 (1997)「一語文とそのイントネーション」音声文法研究会 (編)『文法と音声』pp. 75-96. 東京: くろしお出版.
- 白岩広行 (2011a)「福島方言の問い返し疑問ーイントネーションによる区別ー」『阪大社会言語学研究ノート』9. pp. 14-29.
- 白岩広行 (2011b)「福島方言の文末イントネーションー意味的な記述への視点ー」『日本語文法』11 (1) pp. 88-104.
- 高丸圭一、松田勇一 (2008)「栃木方言における聞き返し疑問形のイントネーションのモデル化」『宇都宮共和大学論集』9. pp. 49-68.
- 田窪行則、金水敏 (1996)「対話と共有知識ー談話管理理論の立場から」『月刊言語』25 (1) pp. 30-39.

# The rising-falling intonation of the Takahagi dialect

Kumiko SATO

(Nagasaki University of Foreign Studies)

This paper aims to provide a description of the intonation which occurs at the end of sentences in the Takahagi dialect spoken in the northern Ibaraki prefecture. The intonation is a rising-falling tone which often appears when the speaker reminds the hearer what the hearer has just said. The observation suggests that there are two conditions.

- (i) The rising-falling intonation appears at the end of the sentence followed by Q-particle *-ke* and the one-word sentence which consists of only a noun phrase (+ *joshi*) or an adverb.
- (ii) The rising-falling intonation does not appear at the end of the sentence which contains WH-words.

This paper also considers the rising-falling intonation which appears at the end of the (echo) questions of the Takahagi dialect. By showing that it appears when speaker does not request any information from hearer, it is concluded that the rising-falling intonation of the Takahagi dialect indicates the speaker's inference of what the hearer is thinking.

(初稿受理日 2014年3月24日 最終稿受理日 2014年7月10日)